



The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 53 号

(2018 年 8 月 6 日)

発行所：立正大学心理学部 西田公昭研究室

日本グループ・ダイナミックス学会

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：西田公昭

編集担当：杉浦淳吉

目次

★★★ 日本グループ・ダイナミックス学会 第 65 回大会開催の挨拶 ★★★	1
★★★ コラボ・リクエスト企画 ★★★	2
企画の趣旨	2
コラボ・リクエスト企画への応募経緯	3
★★★ 『実験社会心理学研究』 Short Note 始まる ★★★	4
お薦め Short Note 大高 瑞郁 (山梨学院大学)	4
Short Note への投稿 出口拓彦 (奈良教育大学)	5
三浦麻子・編集委員長からのコメント	6
★★★ 事務局からのお知らせ ★★★	7
★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★	8

★★★ 日本グループ・ダイナミックス学会 第 65 回大会開催の挨拶 ★★★

大会準備委員長
大坪庸介 (神戸大学)

今年は 6 月の大阪府北部地震、7 月の西日本豪雨と天災が続いております。皆様が大きな被害に遭われていないことをお祈りしております。さて、来る 9 月 8 日 (土)・9 日 (日) に神戸大学文学部にて第 65 回大会を開催させていただきます。

昨年の東京大学とは違いアクセスのよくない立地に加えて、社会心理学会との日程も近く、果たして十分な数の発表が集まるだろうかと気を揉んでおりましたが、発表登録を1週間延長した結果、口頭発表37件、ポスター発表43件、ワークショップ3件のお申し込みをいただくことができました。例年より少し数が少なくはありますが、2日目はお昼過ぎに終了するプログラムにしておりますので、集中した大会になるのではないかと期待しております。

今大会では、産学連携を促すための理事会企画、コラボ・リクエスト企画という新たな試みが行われます。この企画では、一般企業、NPO団体や公的機関の方々にポスター発表をしていただき、共同研究可能な研究者との出会いの場を提供することが目指されています。コラボ・リクエスト企画のポスターはポスター・セッション1で発表されるだけでなく、その後は休憩室に掲示されています。ぜひポスター・セッション1または休憩室に足を運び、新たな共同研究のきっかけとしていただければと思います。

ポスター・セッション2では、神戸市内の兵庫県立長田高校・特色類型コースの高校生を3組招待し、彼らが1年かけて行ってきた研究をポスター発表してもらいます。どんな内容の研究をしているのだろうと思われる向きもあるかもしれませんが、どれもグループ・ダイナミックス学会にふさわしい内容の研究です。タイトルはプログラムに掲載されますので、ぜひ高校生の研究に専門家からのコメントをお願いします。

また、2日目の朝には、実行委員会企画としまして、Curtin Universityの浜村武先生に「Big Dataと文化心理学」というタイトルでご講演をいただきます。最近では学術雑誌を見ても、過去のサーヴェイなど“Big Data”の解析を含むような論文が増えてきています。こちらからは「どのような内容でも結構です」とお願いしたのですが、浜村先生には、まさに時宜にかなったテーマを選んでいただき、実行委員も今から浜村先生のご講演を楽しみにしています。

神戸大学の立地は必ずしも便利とは言えませんが、その分、キャンパスからも神戸の街並みや六甲山の緑を楽しむことができます。また、少し移動すればロープウェイで六甲山に登ることもできます。秋の気配がただよいだしている（であろう）神戸大学のキャンパスで皆様にお会いできることを楽しみにしております。もちろん、予約していただいていない方の当日参加も大歓迎です。

★★★コラボ・リクエスト企画★★★

企画の趣旨

中島健一郎(常任理事・渉外担当)

「学会と社会との接点をもっと増やす、社会とのつながりを強くしていくことはできないだろうか？」

西田会長のお言葉をもとにはじまったのが、この「コラボ・リクエスト企画」の立案でした。“社会とのつながり”をキーワードとして、どのようなことが可能か、常任理事と大会準備委員会の先生方と協議しながら、具体化していきました。その内容はすでに会員のみなさまに届いている通りです。

この企画の目的は、学会発表を通して研究者とクライアントとのマッチングを行い、産学連携を中心とした共同研究へと展開していくきっかけを提供することです。ここでのクライアントとは、主として一般企業の方々だけではなく NPO 団体や公的機関の方々を指しています。当学会と日本社会心理学会のメールニュースで呼びかけをしたところ、一般企業の方から NPO 団体などさまざまなところから計 8 件の応募がありました。それぞれ独自の研究を展開していく計画があり、その中で相談したいこと、困っていることがあるようです。

会員みなさん、ぜひ応募者の方々の発表をお聞きし、ひとつでも良いのでアドバイスをしたいだけないでしょうか。学会大会の場が、人と人をつなぐ機会となり、そこでの“縁”がさらなる広がりを持っていくことで、学会と社会とのつながりが今まで以上に強くなっていけばと思っています。そのためには、会員みなさまのご協力が必要です。どうぞよろしくお願いいたします。

コラボ・リクエスト企画への応募経緯

坪井 翔（株式会社応用社会心理学研究所産業組織心理学事業部）

このたびは日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会のコラボ・リクエスト企画に採択いただきましてありがとうございました。弊社は社名の通り「社会心理学」を応用し、新しい価値を発信することで社会に貢献するシンクタンクです。産業組織心理学事業部では主に企業を対象に、従業員意識調査を実施、分析・報告する事業を行っています。こうした事業を進めるなかで、近年多発している品質問題をいかにして予防するか、という関心が多く企業から寄せられるようになりました。このための質問項目の設計や分析方法を模索している際に、弊社の創業メンバーでもある奈良大学西道実教授よりコラボ・リクエスト企画を紹介され、「学会（発表）を通して、研究者とクライアントとのマッチングを行い、産学連携を中心とした共同研究へと展開していくきっかけを提供する」との目的に正に合致すると思い、応募いたしました。

属人的組織風土（岡本・鎌田, 2006）の観点から、各企業の組織風土の属人性を測定する尺度の作成、および従業員のモチベーションや組織風土に対する意識に関するデータベースの集積を通じて、共同研究へと展開していくきっかけとできれば幸いです。既存のデータを分析した結果を発表というよりは、今後の研究計画といった方が近いため、本来であれば学会発表という形式は不適當であるかと思いますが、集団現象を心理学的に解明するプロフェッショナルの皆様より質問項目の設計や分析方法についてご教示いただければ幸いです。こうした貴重な機会を与えてくださった学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

☆☆☆『実験社会心理学研究』 Short Note 始まる☆☆☆

2017年10月より『実験社会心理学研究』に新たなカテゴリ「Short Note」が誕生し、2018年7月24日現在で3編の論文が早期公開されています。論文そのものは以下からご覧いただくとして、ここではお二人の論文の著者から、Short Noteの特徴についてご紹介いただきます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/-char/ja/>

お薦め Short Note 大高 瑞郁（山梨学院大学）

この度 Short Note として投稿した論文が、めでたく実験社会心理学研究に掲載されることとなり、Short Note について寄稿する貴重な機会を戴きました。Short Note は「既に公刊された研究成果の再現性検証、速報性を重視した報告、萌芽的発想に立つ報告などについて、英語で書かれた論文」として2017年10月1日より実験社会心理学研究に新設された論文の種別です。

私が Short Note に投稿してみようと思ったのは、何よりもまず「英語」だからです。我々の日本語を母語もしくは第二言語とする人口1.3億人、対して英語は8.4億人 (Ethnologue, 2015)、英語で論文を書いた方が、読んでくれるかもしれない人の数が格段に多い！とはいえ国際査読誌からは reject され続ける日々・・・のなか Short Note の新設は正に「捨てる神あれば拾う神あり」の吉報でした。

そして2017年秋の第64回大会で報告した内容をまとめ Short Note として投稿したのが2018年4月24日だったのですが、「論文審査に際しては、良質な論文を迅速に出版するために注力する」との投稿・編集規程に嘘偽り無く、なんと5月14日に第1稿の審査結果を戴きました。GWを挟んでいるとはいえ、迅速過ぎる審査に驚嘆すると共に、お忙しいなか貴重なお時間を割いてくださった審査者の先生方に頭が下がる思いでいっぱいでした。という訳で私も頑張らねばっ！と奮起し21日に第2稿提出、28日第2稿審査結果、29日第3稿提出、31日受理と、ほぼ1カ月で審査完了となりました。審査過程は、論文の内容や審査者の先生方の状況次第で異なるかと思いますが、編集委員会の先生方が御尽力くださることは間違い無いと思われますので、審査の迅速さだけでも Short Note として投稿する価値が十二分にあると思います。

また、改稿に係るやりとりが全て日本語なことも大変有り難かったです。というのも今回の論文は、家族間の視点取得を Social Relations Model (Kenny, Kashy, & Cook, 2006) に基づいて検討したもので、身近な社会心理学者に対面かつ日本語で伝えることも難解な内容でしたので、匿名の審査者の先生方と文書かつ英語でのやりとり、かつ私の英語力では改稿に困難を極めただろうことが想像に難くないからです。

以上どの点からも、本当は内緒にしておきたいくらい（笑）Short Note お薦めです！そして Short Note 新設に係る多大な業務をお引き受けくださっている編集委員会の先生方には、尊敬と感謝の念に堪えません。最後になりますが、この場をお借りして改めて、審査者の先生方に心より御礼申し上げます。御多忙にもかかわらず大変迅速に御審査くださり、本当に有り難うございました。

Short Note への投稿 出口拓彦（奈良教育大学）

1 研究の内容

今回投稿させていただきました論文の題目は，“Analyzing the spread of rule-breaking behavior, focusing on talking in class, based on decision matrices in a critical mass model with local interaction”です。大まかな内容としては、限界質量モデル(e.g. Shelling, 2006)を基にしたコンピュータ・シミュレーション (e.g. 高木, 2004) の「出力」(予測値)を、「質問紙で測定した値」(実測値)と比較することによって、モデルの妥当性について考察してみよう、というものです。

2 なぜ Short Note に投稿したのか？

Short Note は、「既に公刊された研究成果の再現性検証、速報性を重視した報告、萌芽的発想に立つ報告など」(「Short Note 投稿・編集規程」より引用)を扱うものとされています。「限界質量モデル」の発想自体は、何 10 年も前からあるものです。このモデルに基づいた質問紙やシミュレーションによる研究も、高木先生によって複数発表されています。こういった意味では、投稿した論文は「再現性検証」的な側面を持っていると考えられます。一方、「シミュレーションで得られた予測値」と「質問紙で測定した実測値」との比較によって既存の理論モデルを検証する、という研究方法については、(少なくとも社会心理学の分野では)「萌芽的発想」も多少は含んでいると思われます。このように、研究の内容と Short Note の特徴が一致しているかも…という気が(個人的に)したことから、投稿を考えました。

3 執筆・投稿してみて感じたこと

まず、査読が非常に早かったです(1 回あたり数週間程度)。査読コメントの内容も建設的なもので、大変勉強になりました。次に、Short Note ということで「2,500 words」以内という文字(単語)数制限がありますが、これは図表等を含めてなので、かなり厳しい制約でした。ただし、この制約によって、記載内容の取捨選択を必然的に行うこととなり、論文を推敲する際に役立つ面もあります。なお、この「2,500 words」制限が厳しいのは初回投稿時のみのようでして、修正校投稿の際は、数百 words の超過であっても認めていただきました。

あとは、「英語」限定の論文種別ということで基本的に全文英語での執筆でしたが、前述のように単語数制限があるので、国際学会等で発表をされている方であれば、それほど負担にはならないかと思います。ちなみに、査読コメントは日本語です。修正対照表も日本語で作成して問題ありません。また、「付録資料」については、査読者の先生から「場合によっては英語でなくてもいいですよ」という主旨の暖かいご配慮もいただきました(何となく申し訳なかったのも、今回は英語にしましたが…)。

4 今後に期待すること

Short Note は、国際誌への投稿に向けた「最初の一步」的な位置づけとして、非常に適した論文種別ではないかと思います。(あくまで私の想像ですが、)編集委員会の方々も、このような

ことを意識されつつ査読をなさっているように感じました。「国際誌に投稿してみたいけれども、いきなり英語で 10 数ページ分の原稿を書いて、査読コメントへの対応も全て英語で行うのは大変かも…」という方は、一度、Short Note への投稿を検討なさってみてはいかがでしょうか。本論文種別への投稿が研究発表の国際化を促すものとなることを、一会員として心より期待しております。

最後に余談です。英語論文執筆の「手始め」として、例えばですが、「最初は日本語で投稿し、掲載決定後、〇ヶ月以内に英語に全訳したものを最終原稿として提出する」という論文種別（「ショート no・te はじめ」？）があっても面白いように思いました（他の雑誌に同様の制度が既にあるようでしたらすみません）。いわゆる「短報」のため文字数も比較的少なく、また、掲載が決定してから英訳をするので、英語が苦手な人でも動機づけを保ちながら論文を執筆できるのではないのでしょうか。

三浦麻子・編集委員長からのコメント

2017 年秋に新設した「Short Note」カテゴリには、2018 年 6 月末までにのべ 11 本（不受理後の再投稿を含む）の投稿があり、これまでに 3 本が受理に至りました。一方で 5 本が不受理ですので、決して「載せやすい」カテゴリではありません。Short Note の定義は「既に公刊された研究成果の再現性検証、速報性を重視した報告、萌芽的発想に立つ報告などについて、英語で書かれた論文」です。3 つの具体例を挙げてはいますが、もちろんそれらに限るものではありません。編集長としては、英語にすることで自分の研究が他者の目に留まる可能性を上げたい、というニーズにお応えできればと願っています。

Short Note でもっとも困難なのは、新規投稿時に本文その他の語数を規定の 2500 語以内に収めることかもしれません。確かに研究のすべてを語ろうとすると、この語数は極めてシビアでしょう。実験手続きの詳細や調査票、付加的分析結果などは是非付録にしてください。公開を希望される際は J-STAGE の電子付録サービスを活用しますが、冊子版にはリンク先 URL を含めることで対応します。日本語で書かれたものでもかまいません。なお、付録も審査対象ですので、受理決定後の追加は認められませんのでご注意ください。

論文審査は迅速かつ的確をモットーに、編集委員長ないしは副編集委員長が主査を務め、副査は原則 1 名として、編集委員諸氏のご協力を仰いでいます。上記したとおり多くの投稿があり、正直なところモットーを実行するのはなかなか骨が折れます。しかし何事も最初が肝心という思いで頑張っています。原則として初稿の査読で採否を決定し、掲載には大きな修正が必要と判断される場合は不受理とする一方、修正を求める場合は受理を前提とした軽微なものにとどめることにしています。つまり、受理の可能性は否定できないが完成度の低い論文は、初回で不受理となります。もちろん査読は添削ではないので、日本語論文であっても基本的にそういう方針ですが、よりその可能性がシビアに見積もられるとお考え下さい。

SSCI などにインデックスされているわけではなく、決して雑誌としての格は高くありません（控えめな表現）。しかし、学会員であれば誰でも無料（ページ数超過や PDF のカラー図版には別途実費をいただきます）で投稿でき、誰でも無償で閲覧できる電子刊行（しかも早期公開）がされ、審査のやりとりは日本語 OK、という査読誌はごくわずかです。「ああ、お金払って載せた

のね」的な国際誌に 名ばかりの「査読」を受け、高額に掲載料を払うのと比べていかがでしょうか。あるいは、査読など受けずとも、さっさとプレプリントサーバにあげてしまえばいいじゃない、というご意見もあるかもしれませんし、それが向くコンテンツもありましょう。しかし、ピアレビューの意味はそう廃れたものでもないと思います。

こうした実社心研 Short Note の「魅力」に少しでも心動かされた方、是非とも投稿をご検討下さい。

Short Note 投稿・編集規程：

<http://www.groupdynamics.gr.jp/documents/journal/guidelinesShortNote201710.pdf>

★★★ 事務局からのお知らせ ★★★

研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金の一部を補助するものです。昨年度は2名の会員への補助を行いました。今年度も引き続き募集しています。年齢の制限はありませんし、複数の論文校閲費を合算して申請できます。また、補助対象となった会員の方々についても、年度を超えれば改めて申請することが可能です。皆さまで奮って申請してください。詳細については学会ホームページをご参照いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

学会 HP: http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html

国際学会発表支援制度について

この制度は、日本国外で開催される国際学会での発表支援を毎年度行うものです。申請締め切りの時点で発表予定のものだけでなく、すでに発表したものも支援対象となります。また、他学会の支援制度との重複受給も可能です。昨年度は1名の会員に対して支援を行いました。来年度の締め切りは7月31日（水）の予定です。詳細については学会ホームページをご参照いただければ幸いです。皆さまでの応募をお待ちしております。

学会 HP: <http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html>

実験社会心理学研究 掲載予定論文

実社心研 58 巻 1 号（8 月末刊行）（早期公開済）

原著 齋藤 真由・白岩 祐子・唐沢 かおり

大学生における司法参加意欲の規定因：要因関連モデルを用いた検討※

資料 柳 学済・堀田 美保・唐沢 穰

外集団成員との相互作用の予期が集合的罪悪感に与える影響※

原著 宮前 良平・渥美 公秀,

被災写真による「語りえないこと」の恢復

資料 宮島 健・山口 裕幸

印象管理戦略としての偽りの実効化：多元的無知のプロセスにおける社会的機能

原著 長谷川 孝治

ボイストレーニング・プログラムへの参加経験が心理的健康と夫婦間コミュニケーションに及ぼす影響—高齢男性と配偶者の well-being を促進するか—

Short Note Juri hori

The structure of human well-being related to ecosystem services: A Japanese case study to confirm the repeatability of previous findings.

早期公開済論文

原著（特集） 杉山 高志・矢守 克也

津波避難訓練支援アプリ「逃げトレ」の開発と社会実装—コミットメントとコンティンジェンシーの相乗作用—

Short Note Mizuka Ohtaka, Kaori Karasawa

Perspective-taking in families based on the social relations model

Short Note Takuhiko Deguchi

Analyzing the spread of rule-breaking behavior, focusing on talking in class, based on decision matrices in a critical mass model with local interaction.

掲載決定論文

資料 笠置 遊・大坊 郁夫

複数観衆状況における共通特性の自己呈示が個人内適応および対人適応に及ぼす影響

原著（特集） 藤原 健・伊藤 雄一・高嶋 和毅・續 毅海・増山 昌樹・尾上 孝雄

演奏者の重心移動を用いた演奏連携度の取得と演奏に対する評価

現時点で冊子として公刊されていない掲載決定論文は上記のとおりです。掲載決定論文は、速やかに [J-STAGE](#) で早期公開いたします。冊子の発刊は年間 2 号と決まっておりますので、掲載号は掲載決定本数と刊行タイミングとの関係に応じて決定します。ご了解下さい。

★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務局支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会 事務局
〒 602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る
中西印刷(株) 学会フォーラム内
TEL : 075-415-3661
FAX : 075-415-3662
E-mail : jgda@nacos.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒 631-8502 奈良市山陵町 1500
奈良大学社会学部 西道実 研究室
TEL : 0742-44-1251 (代表)
E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る
中西印刷(株) 営業部編集校正課内
TEL : 075-441-3155
FAX : 075-417-2050
E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

広報用 Twitter アカウント

本学会の活動をお伝えすべく、Twitter のアカウントを本学会の広報用として 2017 年 8 月より運用しております。

https://twitter.com/jgda_pr

大会の案内や論文の早期公開の情報などを発信するなどしております。Twitter ご利用の方、また使ってみたいとお考えの方、ぜひフォローしていただいて、本学会の広報を多方面にご紹介いただけますと幸いです。

広報関連【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
慶應義塾大学文学部 杉浦淳吉研究室
E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。
(マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください)
杉浦淳吉(広報担当 常任理事)・鶴子修司(広報補佐員)